

「小倉百人一首」を楽しむ面接授業

永井 藤樹

今迄、百人一首を楽しむいとまなどありませんでした。でも、百人一首を読んでみたら、何首か諳んじている歌があるのが分かりました。百人一首の歌だとも知らずに、口ずさんでいたのです。紫式部の「めぐり逢ひて・・・」の歌も、山辺赤人の「田子の浦に・・・」の歌も百人一首の歌だったのだと分かって、意外に思った事から本格的に「百人一首」を楽しみたいと思うようになりました。

そんなことから、平成28年1学期の面接授業「小倉百人一首」を楽しむを受講しました。講師は横浜国立大学の三宅晶子先生。5月13日と6月10日が授業日でした。言わずもがなですが、「小倉百人一首」の成り立ちに深く関わったのは藤原定家(1162-1241)です。百人一首の歴史や和歌の解釈もありましたが、授業の狙いは百首を読んで、自分が最も気に入った和歌、つまり“マイフェバリットソング”を決め、その歌に自分なりの解釈を施し、次にその歌のカルタを作って、作者の人物像や生涯・業績などを調査せよと言うものです。そして最後に「カルタ大会」を楽しむという授業です。江戸時代初期に百人一首が“かるた”という遊戯に発展してから、さまざまな遊びの方法が工夫されてきたそうですが、私たちの遊び方は「源平合戦」というものでした。それは数人が二組に分かれて、それぞれ50枚の下句を三段に並べて相対し、相手側の札を取ったら一枚送り、取られたら一枚もらう。敵陣の札を誤って取ったら、お手つきとして一枚もらう。早く札のなくなった方が勝ちという遊びです。授業は定員30名のところ、20数名の応募でした。面接2日目がほぼ1ヶ月後に設定されているのは、その間に「カルタを作り、諸々の調査をせよ」という意味です。2日目の授業では20名を欠ける人数になっていました。

私の“マイフェバリットソング”は、紀貫之の「人はいさ・・・」の歌です。シラバスに「事前に一首を決めて」と書かれてあったのに、どの和歌にも心が引かれて決めかねて授業に臨んだことから、順番が来ても困惑して答えられずにいたところ、先生から「誰か知っている人は、いませんか」と質問され『土佐日記』の作者を挙げたところ、「それはいい、定家が尊敬している人だから貫之にしなさい」ということで、厭もおうもありませんでした。

紀貫之の歌は「人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香に匂ひける」で、35番目に出てきます。定家が選定したこの歌は『古今和歌集』にあり、この和歌集こそ紀貫之が中心になって編纂した最初の和歌勅撰集です。作歌事情の詳細が詞書に書かれています。それによると彼が大和の長谷寺に参詣する時に定宿にしている家に久しぶりに訪れたところ、その家の主人から「私の家はこうにちゃんとあるのに、あなたは随分お見限りでしたね」と、皮肉っぽい恨みを言われたので、傍らの梅の一枝を折って、この歌を贈ったというのです。互いに心を許しあった間柄であるゆえに成り立つ、当意即妙の挨拶です。中世和歌文学の久保田淳先生は「人はさあどうでしょうか、あなたの心の内はわかりません。しかし、昔馴染みのこの土地では、花だけは昔のままの香で匂っていることです。」と語訳されています。また、同じく中世和歌文学の井上宗雄先生も「人の心は変わりやすいものだから、あなたのお気持ちは、さあどうか分からない。けれど、昔なじみのこの

里は、梅の花だけは昔のままのなつかしい香で咲きにおっていることよ。」と同じように訳されています。

宿の主が女性かもしれないという暗示から、私は次のように訳してみました。「あなたのことは、梅の花の香にのって伝わってきています。最近私が耳にしたうわさによると、あなたのお相手は都でも色好みで評判の高いあのお方というではありませんか。よもや、そのようなことはあるまいと思うのですが、人の心は変わり易いものだから、あなたが心変わりしたのではないかと心配しています。古都平城京に近いこのふるさとの梅の花が昔と変わらぬ香りを漂わせているように、私の心は今もって変わりませんのに」。

「カルタ大会」は、男女三人づつが組になって競技しました。私も頑張って十数枚取りましたが、女性組で上手な人がいて一人で三十数枚を取り、とても敵いませんでした。悔しくも楽しい「カルタ大会」でした。

「百人一首」には、珠玉のことばが散りばめられていて、日本人の魂を揺るがす美しいことばです。

この授業のお蔭で「百人一首」を誦んじれるようになりましたが、忘れないよう日々の詠誦を怠るわけにはいきません。

紀貫之の業績として『古今和歌集』の撰集と『土佐日記』の執筆を抜きにしては語れません。レポートは、その辺を纏めて提出しました。

醍醐天皇の勅命により勅撰集というかたちで実現した歌集が『古今和歌集』です。この歌集以後、二十一続く勅撰集の最初の和歌勅撰集になります。天皇から、紀友則、紀貫之、凡河内躬恒（おおしこうちのみつね）、壬生忠岑の4人に勅命が下され、1111首を収めた撰集が編纂されました。うち「読人しらず」の歌が455首あり、作者の判明している和歌のうちの4割近くがこの4人で占められています。最も多いのが貫之の102首で全体の約1割、次が躬恒の60首、友則46首、忠岑36首であり、貫之一人が群を抜いて多く、従って彼がこの選集の中心になって指導的役割を果たしたと言えます。しかも、この歌集の巻頭を飾る序文を貫之が書き、和歌の集にふさわしく仮名によって書かれた和文体は全く新しい創意でした。この序には貫之の使命感と自負がにじみ出ていて、歌集序の典範として後世に仰がれました。漢字文化圏からの「日本文化」の独立を宣言し、



紀貫之：貞観13年（871）～天慶9年（946）の人。76歳で死去。醍醐天皇と朱雀天皇の時代の貴族。遠国土佐に国司（受領）として赴任。一級歌人でありながら、26年もの間殿上人として最下位の従五位下に甘んじていた宮廷御用歌人。69歳で従五位上に叙任。

才能に恵まれながら、中級貴族に留め置かれた貫之にとって、この時代の閉塞感から悲観主義者たらざるを得なかった人生だったと思われる。

6cm×9cmの大きさの色紙に和歌を筆ペンで散し書きし、上の句に上級貴族の若き貴公子としての貫之の横顔を配し、下の句に梅と鶯を図示した。マーカーで着色して色鉛筆で描いた。

万葉集の〈古代〉への積極的な繋がりを求めながら「古（いにしえ）」と「今」とからなる世界の成立を目指した撰集といわれています。四季美意識や細やかな心情表現、理知的な歌風が平仮名によって書かれ、花鳥絵巻と人生百科の両面を持つ日本の美意識の源流です。実感や実景をそのままうたうのではなく、眼の前の景物から連想を展開し、見えない世界への幻想をうたい、耽美と理知とを一つにしたところに『古今』の特徴があるといわれます。

延長8年（930）から土佐の受領として赴任し、4年間の任期が終わり、承平4年12月21日に国司の館を出発してから、京のわが家に帰着するまでの55日間にわたる上洛の船旅日記が『土佐日記』です。冒頭「男もすなる日記というものを、女もしてみむとてするなり」という有名な一節からこの日記が始まります。作者は女に化け、男性の公用の漢文日記に対抗する女性の私的な仮名日記の立場を取って、帰京する国司の一行に筆者である女性が混じっているという設定です。日本文学史上、初めての日記文学で、後の『蜻蛉日記』、『和泉式部日記』、『紫式部日記』、『更級日記』などの女流文学に影響を与えました。56首の和歌を含み、土佐国で亡くなった愛娘を思う心情が歌に込められて痛切です。「忘れ貝拾ひもせじ白玉を恋ふるをだにもかたみと思はむ」（亡き子を忘れてしまうという忘れ貝を拾おうとも思わない。白玉のような子を恋しがることだけでも、あの子の形見と思うとしよう）そして風浪のため出航できず帰京をはやる思いを述べたり、言葉の洒落を用いたユーモアや風刺、船旅の見聞を時には虚構を交えて描写しています。土佐湾を進み、室戸岬を回って北上し、紀伊水道を通過して瀬戸内海を経由する船旅は当時、藤原純友らの海賊が猛威をふるっていて、かなり危険の伴う厳寒の船旅でした。「このわたり、海賊の恐れありといえ、神仏に祈る」と書き、海賊の出現を畏れ、天候気象に強い関心を寄せています。また、安倍仲麻呂の「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かな」や、在原業平の「世の中に絶えて桜の咲かざれば春の心はのどけからまし」の歌など彼自身が『古今和歌集』に採録した名歌が詠われています。

翌承平5年2月10日にやっとの思いでわが家に辿りつきます。しかし、何かと付け届けもして懇切に留守宅の管理を頼んでいた隣人は、わが心も知らず荒れ果てたままの家屋。隣人への不信任感と亡き子への追慕とが一体になって、「忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。とまれかうまれ、とく破りてむ」という憤懣と喪失感の一節を以って、この日記は終わります。

参考文献

監修 久保田淳 『光琳カルタを読む 百人一首ハンドブック』小学館2013年6月12日第二刷

井上宗雄 『百人一首をたのしくよむ』笠間書院2005年2月28日三版第一刷

吉海直人 『百人一首への招待』ちくま新書2004年4月30日第三刷

藤岡忠美『紀貫之』講談社2005年8月10日第1版

校訂・訳者 菊地靖彦・久保田淳外『土佐日記・蜻蛉日記・とはずがたり』小学館2008年11月

五味文彦 『藤原定家の時代—中世文化の空間—』岩波書店2007年1月19日第四刷

小川靖彦『万葉集と日本人』角川選書539